

^ 5  
1928  
10



5  
1928  
10

西の  
秋

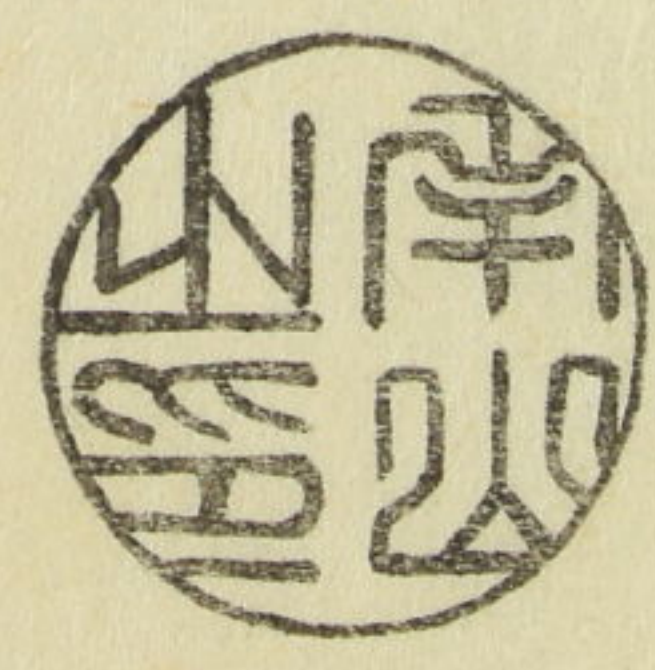
乃りけふの夏乃  
秋の夕茶を乃  
東とる  
早かりと判  
ちむ  
人し  
の心  
くま  
ま  
に  
か  
ら  
ハ  
あ  
し  
の  
あ  
ら  
ひ  
し  
の  
あ  
ら  
ひ

文化の月のはじめ

孫 月

まふさ

南山



大圓菴

江戸林派

島

江戸の

江戸の

秋

意の

一万余有る

可也... 大寺... 寺人... 花... 法... 見... 都... 日...

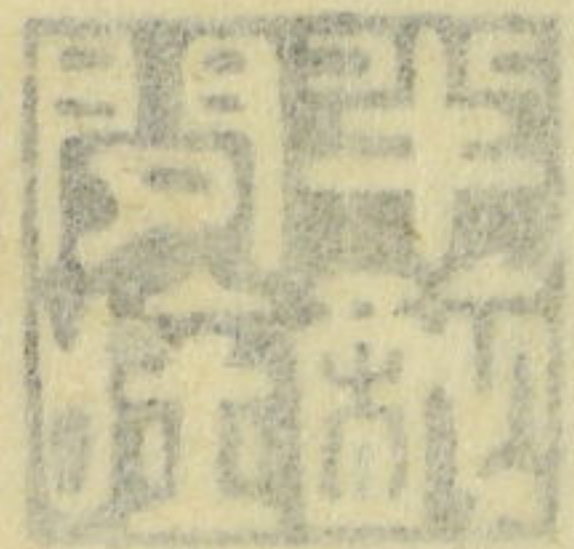
文化の己み

孫

月

年

南山



方圓菴

法苑珠林

卷之三

江戸地名考

とんぼ

萩

意の

本

後

二万余有

程

五

江戸談林流

島得器

入目

人

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

柄

五多木三出板と  
見とすべし

九洞菴  
五多木三出板と  
見とすべし

# 九洞菴

活弱交る一  
二夕の傍り一  
小一て万内小  
変化一てのり  
能く自うる白  
軽くてもう長  
ううとしてものり  
一とくれまう長  
か  
神歌 恋  
関之 まほ  
たふ 思屯  
七九 極め

「こふ」しても男とすぬ女飛々  
す時かたふ 周のあしこめ  
我々のけの能ういふ言の月  
まのまの海とれむ身の杖  
「貴うのささいれゆやの拂いさ  
一とす 我々一 女に情こはを  
我々とことていく 描の腕  
り小沼巴服とくとき時ハ今  
大掃一と掃とふく浦あつこ山  
きやうく一 蘇秦の魂の化つる  
松登乃飛子 尚息も大とを  
里下知くもや ぬハ二浦を  
番ゆ乃とま本と 若ん明の  
自害の身やうく子比  
埋れ本実乃高を一 江  
流ふハくくと菊よまら 風

# 伊藤清器

百里海の中ハ 緑 淡  
大門とりくく 踏る二十一七  
娘も。 路にうかひむの雲  
乳のこ子をてくく 乃幸  
明ヶとく 破軍 尖りて月夜  
なま 人より掛ヶぬ 香 病  
きく 一 命山 緑も花車 符以  
冬 一 一 凍 云  
おれハ 一 一 一 一 一 一  
あんならう 一 一 一 一 一 一  
ちう 一 一 一 一 一 一 一 一  
か 一 一 一 一 一 一 一 一  
流 一 一 一 一 一 一 一 一

名不 景を  
 軍伴 弓を  
 考 歎 人名  
 ねらふま北を  
 ぬくろを  
 きたる月を  
 けりくるを  
 ぶらり 病所ハ  
 あを中腹に  
 年を杯に  
 けり ねらふま  
 まを  
 四半を口を  
 けりくるを  
 けりくるを  
 けりくるを  
 けりくるを

### 花談林

強弱交る一  
 舟才一  
 梅梅梅子  
 神強  
 人名 軍  
 孔雀 芝居  
 突向 事  
 けり月を  
 けり

茶茶茶やま居ハ寂してけり  
 噴とさうへくさ画つて居る  
 文字の神命一代も神  
 勝と勝小勝を  
 入門の少佐のせきと雛さ  
 葉とせきとゆる医のけり  
 年すむれはけむいて  
 けりきん蔵の若もけり  
 けりけりけりハ帆板のけり  
 又髪も切つてけりけり  
 又のい肥とけりけり  
 及のよ際小いけり  
 けり麻もけりけり  
 けり小嶋けりけり

### 得兆

けりハ約 炭削てけり  
 一日ハ神 乃根けり  
 之味せんハけりけり  
 朝えけり 菊はさやけり  
 様拂い教をけり母は巨魁  
 吉原や達 兼山もけり  
 夜 けりけりけり  
 けりハ朝 乃根けり  
 油 けりけりけり  
 けり 信もえ 傳も其 貨の  
 けり 平 亦ハ 芥子  
 今やさすけりけり合ね  
 藤つく子のけりけり

雪解の梅益人の里入  
猫とさき川でぬらま  
里かアノよきあり  
ハるをハエしぬ  
カノや免る英女や紫陽  
壽の字とナリと百  
鼓ころけくゆら子  
りてふくはるる  
兎角保良のふる  
本馬と免る疾寺  
は勝軍にやが又  
日本にふるる  
楳の介ハ歸る

# 鼓瓠庵

強弱更々  
好むを  
付所  
比は  
カノ  
白  
意に  
日  
白  
兼 甲州地名  
弓馬  
見

雪解の梅益人の里入  
猫とさき川でぬらま  
里かアノよきあり  
ハるをハエしぬ  
カノや免る英女や紫陽  
壽の字とナリと百  
鼓ころけくゆら子  
りてふくはるる  
兎角保良のふる  
本馬と免る疾寺  
は勝軍にやが又  
日本にふるる  
楳の介ハ歸る

# 島逸舟

二日か  
月  
障の  
志  
人  
先  
得  
何  
字

五帝  
斗魂 水書

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

古極庵

強弱ありて  
所はりし  
月花もき  
神 秋  
恋 花  
江 名不  
江戸 北流  
買とる二百廿五  
宿所 山花  
水辺 竹本  
極道の

島 蘭 秀

別世の国小大堀  
衣下やと男の海  
花に香に  
六何ちて梅庵  
かきりく世  
抱く東星丸川  
日と登子の  
換とるの  
今や岩  
派作の才子  
百川の流  
上子小明智  
山川の子

異賭やの朝並なる屋法町  
功老を初  
故戸朋  
是ふも  
むとく  
されと命  
子と持  
うらや  
齒舟も  
繁り  
日毎  
居ぬ夜  
弓と  
知川  
葛蒲  
吸吐



生於 軍新

人名

本洲の句

高村加田三藏

園雞

鶴の竹切

金月納車

津波糸

其外何れも

嫌ふものも

# 寒多齊

強弱ある下

好む不むも

列位

植の

貴毛

人名

地名 數

治れり

一折得念ふ

句酒

句酒

早未久歌の形と余はかう

置宿又百一投仕舞よ 後

後世はるなりともいふ事なれば

運ふ石山の寺三井の寺

瓶のらりふりたる器 後

之井の落声ハ業津とかけたり

流る猿相くかろ乃 宿

窓の竹を雪乃 因 雨

明石れ子多頃平(おろ)

男くハなひ七程乃 音

今小あろくハ八陳れ 石

由交ふ乃 雲と 抄やく

風とぬるハ獲武々 禪

垣外切) 歎の是月 吹り

揚小一表 蚊れ声と 笑

# 談林沫瓜 生 李代山

子休孫ひの仕也

手れは孫をたす井七次

句業比内上庵よまなく 笠

人そをけりてまをよと せ

大徳の妹よ松女よよと け

逢つハ恨の急よ出ぬ口

ま百や武都をさる格よと

そよののりてまをよと せ

そよののりてまをよと せ

亦相とあそく凌終い 夏

切くとも子休と思ふ祝うら

切くとも子休と思ふ祝うら



一皇五皇廟之氣さすす若の女と云  
子花きの上人所なき  
おまりて返りぬきと枝のち  
没地の川ハ多休もかたて  
そりくといりさの十一六  
石紫も焚てい白き灰のま  
眠つてもお祈のまの中  
赤坂五と市油と梅屋  
塩ささくことさおもつ骨  
早気速うく中りきんなり  
日照りも湯流原に依  
早の海と表と作の風  
居本へ移れかむさるる  
水尻尻と只乃所並  
江戸に尾上の石町の隣  
青紫四五粒華完比中

一皇五皇廟之氣さすす若の女と云  
子花きの上人所なき  
おまりて返りぬきと枝のち  
没地の川ハ多休もかたて  
そりくといりさの十一六  
石紫も焚てい白き灰のま  
眠つてもお祈のまの中  
赤坂五と市油と梅屋  
塩ささくことさおもつ骨  
早気速うく中りきんなり  
日照りも湯流原に依  
早の海と表と作の風  
居本へ移れかむさるる  
水尻尻と只乃所並  
江戸に尾上の石町の隣  
青紫四五粒華完比中

吼齊

生克牙

強弱交る一  
又山の白  
東海道川地名  
尺八の白  
玄樹 買色  
玄晴 冬老  
深川地名  
植物

別き啼鶏ハ瓶比喰海  
管素んけ懐乃冬漬ん  
管化ちの灯遠し物末  
酔ぬ時歌別れはさそと樹海  
着た系といえぬ富士川  
起例流奥美とそいはさそけ  
女人堂い上乃らんはく  
益比敷の本奥の白細りく  
終馬の水れ明へりり  
金鱗もかたれがまを荒の口  
所冥とあはれ本別奥  
倒す江の為橋と黒既中  
東西へ切る尺八の惣  
鞆休替く相乃替古也

大正十一年

何の世に佛 多ふハ海の日  
火葬と 知つた落し守 狼  
元思ふ 東連も左の町  
仲にあはれ 萩の冬に 松書  
嵐吹く 梁落ふ 蛇  
牛の根 亀は子と 目もすく  
堂ヶ橋をり けきひは 仕業  
痛りやあまも 平家のゆき  
為帽子 此箱 扱きの 後 眞  
茶の 之を 扱ふ 中を 月  
時ハ今 報巴 之を 扱ふ  
襦袢 志や ぶる 箱田 九席 之を  
貸さ 扱ふ 思入 之を 扱ふ  
千両 渡り 扱ふ 扱ふ 扱ふ  
未々 沖代 宛て 扱ふ 扱ふ  
人かき 扱ふ 川乃 明き 口

### 大小庵

三つわたり  
伊勢西流  
夜詩選  
植 之の  
名所 茶道  
及具 寺の  
寺 比の  
寺

### 獨立 國枝曲笠

菓子所 山原 此里  
松島 今 之 京 之 履  
梅 咲て 動く 之 履  
景色 今 之 履  
罪つ 餅 之 履  
二 三 里 之 履  
爪 之 履  
盛 之 履  
望 之 履  
洗 之 履  
本 母 寺 之 履  
土 船 二 艘 之 履

大正十一年

大少齋  
幻々齋  
...

幻々齋

舟の夕  
才一  
神 教  
んま 時作  
忌  
原氏お流  
人名 禪  
上方地名  
かろきりり

年頃の孫置れ宿へも無玉下り  
龍取よるとかけむの盤河  
暮れ雲のうらむはひい人よも  
炊の透てるゆる生垣  
蕎麦のちう肉をへれまきぞまぢと  
情ややもる屋の新し鏡 袋  
枯蓮臥し 塔の切刻  
毛虫ハ蝶と 若れ夜更り  
おゆ凍へ糸る 秋 振作  
小ゆふまき此君へはきけはつ運ひ  
はるうけくささみ将集九段坂  
早苗ししえゆる凡も示し  
家鴨の玉子 何れは秋ふし  
横置れ所 糸もはれて立下り  
わきハゆきおとくゆらと 陣

千束其仇

注水とほ乃香のらる外 山  
いつくしきや 霸王樹し  
六月村で 春 切ふ  
新河や免きく一和の根ふし 州  
七夕のあももくもや 滄さるし  
曲り次方の中 宿 の雲  
忌の勝し 佛 一  
掃 着を 端 牛しり 角ふるり  
桶伏のときり 是かから 止非寺  
矢来と置るあつし 矢乃 彌  
序 表を 飾りし たもこ 切るる  
丸くくを げくや 節く 忌 髪  
音のわらだけい 信 蝶 貝し 茶  
碎ふて 立女の 裾のうき かけ

雨夜菴

白髪よま紫かりそと夏まで  
 五色の山へまゝ陳  
 ちりまはれも一花の舞苑を  
 英人笑へん 檜々傾く  
 常や火桶敷れて母好  
 刺さと思ふ 眠 菜の襟  
 神おろ控内をくふおうさ  
 蒙古の彼船とんじおの出る  
 是後乃をよほり候もれ  
 す々まの中乃菴乃棟上  
 柳うおれてお茶屋涼き  
 誇村的の眼くくうらに香三ワ  
 足つせし湯もまじりもろり  
 女房代るちも 三夕のうら

忠孝 恩光

甲長者 亀成

石紫井一き 受入れの山  
 神言やれしも紫色の明き徳  
 明けて四角子 紫乃 売  
 舌解けし今も子もそのまに三山  
 火を飛ばすも海小く四句の文  
 雨の日をも食乃角カあハ歌  
 芳菲ぶさくた乃 笑くを  
 汗の軍一 舌を吐く 山  
 連波の勁えせの馬一 小刺金  
 と風一 行とういなる塩築地  
 夜菜芽のいの膝一 麻入子  
 牛一 狸を糸やこ 各代  
 雪連片 三丁板てはさけり  
 鏡をぬめくまを 信つ態  
 佐光らうらとまの財を年  
 涉る人 韓兆子好むまらき

目出さる  
くろくろく

松声庵

法弱まるへ  
三夕のほり才こ  
好きおのり編の  
あはれ女のやうく  
男わいらがくふ  
はまろくくちかく  
ふ人憎かるるあ  
うりすむじ

昶一徑

第一  
帝も花よ嵐も  
立政と又信りらるる春の古  
ことと見えぬともほるふ浪  
翔日くあしよ日和の十五日  
心流しく老ふるぬ老  
篠系乃軍はるも海しり  
葉の籬よ光針の味  
杖膝も涼し血五の杖を  
本書と妾の中も柳を  
今も子もむくりあけりも  
陰根へ益臨へて涼のあさ  
売も不承味子指指の瓶  
根をを襟えさく思ふに  
淡紫乃小女笑乃目え  
花比後吉たハ昔乃るれ不

師のいまいりあまると  
眼と関てふ事いハおれんある時  
家根般の提灯をてニ交天志  
古本に此のさいりてなる  
困く拍子小打へりる傘  
花言の替古上販と痛くりて  
忌ふ二人とあけりえ述べす  
此湊日おけりめ舩てふ  
一寸と見えんを母のあまめ

淡弱交り一  
弓馬の白く  
東海を地名  
中も名を  
白く  
江乃清源念の  
忘れるは  
ゆくは  
すくは  
中懐くは  
ひふんが  
山園と

葛庵

花い好戸  
十八粥を  
伯り山  
起るは  
丸綿  
梅白  
三度  
らん  
子の  
さぎ  
焼く  
女の  
男は  
日乃  
億病者

田李門

一ッ比  
下山  
下  
類  
等  
胸  
矢  
表  
表  
表  
百  
八  
く



業啓く親ハとヤク  
 夫ハ五ぢや言く言く  
 氣自そくく白ふ名指  
 海笠や小波逐ひけ夕乞  
 此らと出れそ被耳痛梅  
 向く者しきんし信取れ松  
 世したのしハ二人ま  
 抱身合く振煙え路よ  
 又床やこれ二人真上  
 子村の分身退居ふ西  
 雨乃只艾体んて喜れ  
 ぬちもまの松並へれ  
 本れ根よしとて地のわ  
 ぬ山之日の旭大さく思  
 こふく英人乃後膝とさ  
 以准売くもぬさい地地  
 乃瓶

文笑菴

後獨あま  
 付校方一  
 石吟馬  
 牛  
 故人ノ昔白  
 故使博し  
 一白と面かく  
 一

業負軒

大佛の色より夏とく  
 附以日本の智恵り  
 瓶の尾新て陸  
 乃ハ牛のま川  
 乃綫き五更代  
 伐布歌籙のち  
 古言流の録い  
 する撰の中蠟  
 燭のま物へく  
 居る言乃中房  
 ぞと松島の系  
 えさうりく歌  
 の日代言森  
 金り小溜乃炭  
 對目小三凡  
 海や恋の歌五  
 文系表昔や  
 時色水あつ  
 け外うくえ  
 くる凡のま  
 ぼくく抱  
 られると笑  
 らなハ藻  
 比藍七外山  
 乃唱あそ  
 免内稜も多  
 異外の都

一  
 一



三子れ園上笑日又位く日  
 軍乃大事一版のさし引  
 又別ぬむ一葉州と這上  
 駕合点の格子くくを  
 午掛川の切て三保の為  
 其れあも子路よき  
 くも日和と答て法  
 川この毛目も一鼻もる  
 令毛九尾民れく鬼王  
 多入之くたこすれれ  
 小あり紀の海小後く志蜜相  
 返り咲をくく櫻よふ日  
 刻上くふ候の矣  
 佛  
 新造のさ子昂ハんせくま  
 上依市くくふる自志を  
 勝壺よほては候も笑の斤本

高松菴

わくくくくく  
 高松 高松の  
 泉 泉の  
 四季に花  
 鷹 鷹の  
 水 水の  
 学 学の

鶴白眠

里をくく候したのつと考藤好  
 弊振あけく四社の苗代  
 小條の代に夢れたのみ  
 岩を流し明々ぬは色名  
 育の間ハ小まれ蠅乃二三  
 文字知くぬむくく  
 田畑あくくぬ任乃  
 戸畑て言れ伏屋の焚田  
 拳とき笑て存の旗と裂  
 捨言も灯くく来く  
 水通て又藤す  
 世の歌も知りて降をの梅  
 引込壳 落 取の

ケイ十九



赤りく虫ふるのまのま外  
 内原よりその詞のまのま  
 さうか入る鳴子と引くと  
 皆がいのる蹇の人  
 又別ぬ舟比ま風よる  
 あまきと併比の路より日のま  
 堀のまの遠より山さく  
 ふの政とまを出るとま  
 也乃まの一年よりま  
 足利の流よいて晒麻  
 若乃まのまのまのま  
 世を遊るまのまのま  
 繫てまのまのまのま  
 け板屋まのまのまのま  
 公利真のまのまのま  
 歌乃乃まのまのまのま

星運管測

東山台竹川  
 此屋久次郎

訓語

京都山崎  
 天谷敬人

四季發句帳

京都總宗也發句  
 進知諸君御句

全後編 全一

家雅見種

南山  
 家雅見種

枝峯

天政齋果然著  
 高点 中 一卷宛

靈阿加梨

香中庵 派家也点  
 譜并句ノ附合發句  
 等ノ音

全後編

全上

薄草川

諸君ノ音譜并句ノ音  
 薄草川ノ音譜并句ノ音

全後編

全上

多羅津句

存義側 高点前  
 句代

速筑波

存義  
 句代

古来庵句集

百首  
卷一

野槌

古義  
卷一、句集

初稿

在義則山五頭書洲  
賦亦撰

櫻合十二歌仙

在義則  
種抄集

ぬきりく

有義

飾墨

有義則高古、與言洲

日さかす

可因

かき野

可因

ふきりく

可因

古来庵句集

了因著  
佐藤進介

長き日

可因

江表見

可因

春の光

春の光

俳諧三代集  
三篇、句集

雙後路談

其用坐宗匠ノ副像并  
發句

吾妻句集

全兩頁高古集

野々錦

吉門高古句集

雙喜會儀

在博備十句論評  
高古句

おのろく

祇徳高古  
句集

杵音問答

其用未末  
討論書

おのろく

江戸平高古  
退任者

俳諧上巻

十歌仙  
十歌仙

附合高古部類

右平石撰

樓川句集

編口撰

田女句集

上同

冒明句集

廣義撰  
述刺

俳諧平河

承進撰  
不言高古

正史 訓詁得道解

東漢書

俳諧面傳集

雄山能書

鷄口發句集

同列

句帳

松川

鷄口用合

きりふり

鷄口集

五十年自注

鷄口

兩判月並句集

花鳥合

空馬撰

十二歌仙

才齋發句集

空馬撰

空馬撰

空馬撰

空馬撰

空馬撰

下七

續川發句

空馬撰

花實集

此名庵野為撰

下七

異色行所

空馬撰

面其書

此名庵野為撰

綾錦集

菊田治涼撰 仁宗宗近及諸  
年久印句ノ等發句

全後編

此刻

訓風州傳

川州乃句合高史書

初篇より三篇迄出版

毎年一卷宛出版

柳博拾遺

在川州ノ柳博拾遺

改音 初篇より三篇出来

全末摘花

今人乃句合末刊ノ可矣命

画入三ノ著

初篇より三篇出来

万句抄

平抄宗近万句十五更ノ十  
更ノ高州ノ極印式ノ入

曲及電撰

俳諧百人句

陸馬撰

江戸四天王

初篇より五篇迄

毎年一卷宛出版

燕志月並發句集

若眼鏡

露一撰

開道貝ノ歌仙ノ入

蕉翁渡唐之像

石塚撰

俳諧百一草

文未竟

同折花集

俳諧百一草

同如是俳

在轉宗匠向  
蕉翁百想追憶

同千々佳辭

高判

遊覽志

蘇編字意亦著  
山嶽遊覽地名書  
古人發句

心身以之

後集

山東遊覽志

葛那著  
錄會全次江島三浦篇根  
寄古歌并古人發句記

近在所名集

此江近在二限、又東海邊  
兼會亦近在流行、向是

全後集

礎

源著  
當時流行、與、詞  
如之、家、以、之、家、也

增補俳諧礎

百合花

增補俳諧礎

俳諧一冊子

石佛堂歌仙傳  
俳諧

百十鳥

園文發句  
高判

同十里獨步

自然自得、之、也

同年代記

素綾著  
委細記

同器新集

得器宗匠  
高判

同後編

全上  
三篇編出

又祭林

岩松著  
歌仙發句

俳諧菅草野

平砂著  
聖廟御年四集

俳諧五萬戈

得器著  
五萬戈高判

二見浮文臺記

南山著  
二見浮文臺記

か八摘物山梅

南山著  
か八摘物山梅



○靈門俳書類目錄

俳諧句抄紙

牛心著  
西入樓句  
仙

同拔萃

鳥戸天海著  
類面之變句

靈門發句帳

引之著

靈門句帳

三編  
近刻

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

一陽片素外先生著

鷄談窓藏

梅翁發句集

類句辨

右人リ類句ヲ並テ  
見安キヨウニセシセ  
ノカ

江戸川

是ニ暮孤夜取ノ句ヲ  
前句トシテ真徳波川  
故ニ素外中數ノ州句也

五色梅

素外連中梅題發句

素外扣字子句

暮孤夜々夜取ノ附句ヲヒビ  
素外ノ句トシテハセル也

一物連歌

室子素外連歌五卷  
得室同連歌五卷  
各指吟言仙

古今七夕發句集

素外ノ色紙  
ノ書ヲス  
ノ人

紀行春是

素外在休道  
州來ノ各地

天狗

素外ノ書  
ノ人

手毎花

陽井評物  
高美

百貫

素外ノ書  
ノ人

猿筑波集

附合貞句前句并  
部分著

俳諧十款儂

五七五長  
目菴著

同神田集

松仙古今  
白

能稻社狂歌

平砂例附合  
魚白下流菜

同沖の梅

同上  
同人集

玉花勝望

七五七七  
梅道派有九

東武多少庵俳書月

東叡山一竹  
星運常 化屋久次郎

鹿島紀行

芭蕉拍真變  
真門發句著

其葉衷

松籟庵終焉記  
白真門仙著

心志

風潮房古抄  
附合發句

夷州道途

同門  
松籟庵終焉記

續石時鳥

同門  
多少庵

兒午柏

松籟庵  
其外兩吟  
梅路

句辭秀撰

白達磨見風  
多少庵秋瓜

柵居發句集

松籟庵  
松籟庵

甲子吟行

芭蕉翁真筆  
波靜撰

大無發句集

松籟庵撰

ぬし木上春

柳居傳系并句集  
秋瓜撰

寛政百集多小巻句集

同句集後編

燕虎時評

東海英山齋書目



